

いの流水俳壇

松尾 満津於選

「当季雑詠」

神の留守目礼のみで通りけり

竹崎 光子

〔評〕この神社の木樹も落葉して、神域の風光が頓に荒れ衰え寂寥の感じから遠のく。旧暦十月は諸国の神々が留守であるというので、この月を神無月とよんでいる。この句の作者にはそんな気はなかつたかも知れないが、神の留守だという今月の神社に参らなくても、また次の機会ということもあつただろう。今日は目礼だけ……誰もが経験するこゝとであるだけに、ズバーと言いつけられると「ああそうだったか」と、納得出来る句である。

暮れのこる棚田のいくつ蕎麦の花

友草 水月

〔評〕この句の蕎麦の花はどんな状態のもとに咲き、そしてその白い花がこの先どんなに変わるのか。この句に出てくる棚田の情景は平地と層を異にする山地。山地の棚田は昨今水稲の作付なし

で終止することが多い。山峡の棚田の多くは水稲の作付がないままその棚田跡には「蕎麦」が作付され、白い花が一面に咲いて深みゆく秋を意識させ蕎麦の収穫を待っている。こんな情景が決して珍しくない昨今である。情景の理解ができれば解説の要らない句である。

立冬の風に己を晒しけり

植田 紀子

〔評〕「立冬」は陽曆なら十一月上旬頃。その頃吹く風に身を晒しているのである。落葉し尽くした木々を眺めながらしばらく歩を止めて、あたりの風景に見入る。単明なりズムに軽やかなおどろきがある秀句を得るためには、それなりの気力が必要であろう。日頃の努力の集積が身についてフツと口について生まれた作品であるように思えるのだが。

横抱きにされて畑去る破れ案山子

岡本とも子

〔評〕案山子はもともと田畑の作物が、鳥獣に荒らされるのを防ぐために、田畑の隅や作物の畑中に設置するもので、用済みとなった、竹や木藁等の材料品は、田畑の隅や空地に片付けられていく。次の時季に必要なまで、大事に保存されるのである。

落葉踏むころにいつも誰かいて 間 浩太

冬支度独り暮らしの気楽さに 津田 久美

良く出来た案山子と褒めて笑いけり 片岡 包女

献体や秋風の賦を一人聞く 大川 節弥

庭椅子の朽ちし歳月石落の花 刈谷 志津

白菜の大小気ままに巻きそめし 井上 郁子

急かされているかに熟れる実南天 竹崎たかひろ

いわし雲瀬戸内の島赤くそめ 森岡 照月

晩秋の風がひたひた背筋押す 川村 博子

新築の軒先眩し吊し柿 筒井 正子

能登の香の新米届く代替り 岡村 嘉夫

花野菊石佛古りてまだ幼 門田 京子

コバイン垂るる稲穂を吸い込めり 筒井 一平

女郎花静かにこぼれ風の道 弘瀬うき子

夕陽射す白壁の倉柿吊す 野本 則昌

海に向く流人の歌碑や雁渡る 伊藤 萩甫

年暮るる八十五年の顔の皺 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」

締め切り 毎月第2月曜日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

☎ 867-2133

今月のごとも川柳

参観日 せなかにしせん 感じるよ

伊野小5年 森木 菜結
〔評〕参観日の子どもたちの素直な緊張感が可愛く溢れ出る。

せんりゅうは 人の心を うつしだす

川内小6年 山本 翔
〔評〕川柳を子どもらしく理解してくれていることが嬉しい。

音楽は 人の心を うごかすよ

川内小4年 金子明香里
〔評〕子どもの素朴な感受性、大切に受け止めた。

だれよりも まけないえがお 作るんだ

川内小3年 伊藤 葉菜
花粉症 マスクとともに いざしゅつじん

長沢小6年 古田 朱羅

ぼくたちの ゆめをいっばい、えがうよ

川内小2年 手塚りゅうと
赤とんぼ タヤげぐもと おさんぼだ

川内小3年 古谷きらり

ゆきむしが 冬を知らせた 飛んできた

長沢小6年 山中 佳乃
紅葉だ 色とりどりで にじみだ

秋になり 夕日が赤く もそいで

川内小4年 野口 朱里
※「ごとも川柳」は町内全小学校の児童の皆さんを対象に募集しています。次回提出締め切りは1月20日です。たくさんの皆さんの応募をお待ちしています。

〔応募は各小学校を通じてお願いします。〕

※選評は、川柳連会の皆さんにお願いしています。